

2024 年度入学試験問題

国 語

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の注意事項をよく読んでください。
その際、問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子のページ数は 29 ページです。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 解答は解答用紙の問題番号に対応した解答欄ごとに1つだけをマークすること。
同じ解答欄に2つ以上マークすると無効となります。なお、解答用紙の番号は①～⑥まで記入してありますが、問題によっては解答する選択肢が6つ無い場合があります。
5. 解答は HB の黒鉛筆を使用すること。
6. 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを完全に取り除いたうえ、新たにマークし直すこと。
7. 問題冊子の余白等は自由に利用してかまいません。
8. 解答用紙を持ち出してはいけません。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

建築のレベルで明確に現われた均質空間は、スケールをひろげた都市の背後にも現われているだろうか。実際の都市は、個体としての建物に比べてはるかに関係が錯綜しており、とても均質空間の理念が背後にひかえているとは思えないふしがある。むしろ、それとは逆に非均質な空間であるかに見える。多くの都市は、近代以前にその発生をみて、近代はそうした古い部分にかぶさって形成されているし、また都市の大部分が近代化されてはいないからである。住環境として近代的に整備されていないばかりか、制度としても前近代的なものどもが残存している。

しかし、このような複雑な都市にも、明らかに自然からの切断、場所性や意味性の捨象を現象のうえから指摘でき、理念として背後にひかえている均質空間を透視することは不可能ではない。そのためには、都市を構成する様々な空間的な要素から、移動性つまり交通系統を抽出し、この概念に添って空間の意識のされ方を把握してみるのが適当であろう。

都市は、自動車をはじめ様々な交通機関の出現によって大きく変化した。遊牧民のような特殊な例を除けば、古くは人々はあつる場所に固定して生きることが原則であつたのに、交通機関の出現によって人々は移動して生きるのが通常になつてしまった。

この変化はかなり急激におこつたために、都市空間を形成する理論や手法が十分に準備されないうちに、都市の移動網が自動的にはたらきだしてしまつた。 A、都市形成の理論や方法は、どちらかといえば現実のめまぐるしい変化にふりまわされてしまい、有効な統御の役割を果せず今日までできているし、また現在でもそうした傾向が避けられているとも思えない。

都市といつても、キ(フ)ボのちがい、歴史のちがいによって、また近代化の程度によって、一概にとらえられないが、移動の活性化とそれにもなう場所に準拠した近隣社会の崩壊は一樣に指摘できよう。このふたつの現象は、双対であつて、おそらくどちらが先に起つたとはいえないだろう。もちろん、交通機関の出現をまたなければ、移動は活性化しなかつたにちがいないが、だからといって地域的な社会集団の崩壊に直接結びつくとは思われない。地域的な集団が、その秩序を保存しようとするば、たとえいかに移動が活潑になろうとも、それなりの空間的な手当てではできただけである。移動の活性化とコ(イ)オウして、近

隣社会は解体することがのぞましいとする近代の意志がはたらかなかつたら、こうした現象はおこらなかつたらう。

一九三〇年代までに世界の建築家が提出したイメージは、移動の高潮をふまえたうえでも、近隣的なコミュニティ論が都市形成の基礎にすえられていた。都市に住む人々は、自立的な場所を確保し、その場所内部に中心、核を共有して全人的な交流をする。そうした中世的な都市のイメージがたてられていた。この構想のもとに、都市空間の研究がすすめられたのだった。ところが現実の移動力は彼等の想像をこえて激しく増大し、そうしたコミュニティ構想がまったく夢物語りであることが次第に判明してくる。都市に住む人々は、場所に根ざすどころか逆に場所のもつ境界をなくしてゆくように行動していったのである。

一九五〇年代になると、都市に地域的なコミュニティを形成しようとするのが無理であるとする風潮が高まり、コミュニティ論の現実的でない点が批判されるようになる。地域的なコミュニティに代って、自由に形成される機能的な集団が現実に出てあげられ、都市はこうした集団形成に最大のチャンスを与えるように計画されるべきだと考えられるようになった。そのためには、⁽¹⁾ 高い自由度の移動性をそなえた都市がイメージされる。この場合、想定されるのはなんらかの目的によつて形成される集団であり、その集団が形成される原因も空間と対応づけることはもはや不可能である。また、都市のどの場所によつて形成される集団が形成されるかも不明である。また当然ながらそうした集団が相互にいかなる関係にたち、いかなる意味をもつかを都市空間と対応づけることもできない。極端に言えば、都市とは移動網そのものである。

こうした変化は、都市空間のとらえ方のうえでかなり基本的な転換を意味する。都市とは集団的な活動の場所の指定であり、それらの場所の組織的な秩序だてであったのが、境界が判然としない領域相互を関係づける秩序となった。この判然としない空間的な領域を準備するのが、具体的には建築的なレベルでの均質空間である。もし、建物が特定なはたらきと意味をもっているとすれば、移動のネットワークはそのまま都市の関係を固定してしまふ。その内部で一定の関係の成立を指定しない、つまり機能を捨象した容器が待っていないければ、都市は移動性に準拠して計画することはできない。

総てが均質空間を理念としてはできておらず、古い部分もあるから、終局的に都市の移動網はあらゆる点を結ぶ完全グラフが意図される。この完全グラフの都市は、移動のネットワークの補完項としての電話網などによつて、事実かなり高度に実現されて

B

いる。

都市は建物の個体とちがって、全面的に改造されることは少ない。整備された移動網は、都市の構造改革にむけて古い都市部分に露骨にかぶせられた。いずれの大都市でも、近代化されるほどに、道路は周辺の状況をさほど考慮することなく計画された。古い都市に残っていた場所の意味、自然の状況等が無視されて道路は走った。しかし、計画通り都市総体の空間のフレキシビリティは高まり、より広域的な都市間の連続性も高まったのは事実である。移動のネットワークの上どんな目的でもプロットでき、もはや距離はさしたる配置上の要因にはならない。経済効率さえ許されれば、ある集団がどの場所で活動しなくてはならないという空間的指定からは解放されたのである。移動を前提とすればある集団と他の集団とが隣接している必然性もなく、それらは全く総合的な効率のうえで配置が決定される。

C

、都市の諸機能を発揮するための、機能的な配列もまた実現されない。

こうした都市の空間的な性格は、建築の領域でとらえた均質空間の性格と同相の下にある。都市もまた特定の関係の固定を避け、場所の特性を捨てる容器である。こうした都市総体を均質空間に近づけるためには、移動性ばかりではなく、都市の諸要素の時間的な交替の自由度を高める方法がイメージされたり、諸施設そのものが移動する方法が考案されるのである。

都市に近隣的なコミュニティが残されるなら、場所性から解放されることなく、場所に依拠した部分領域の集合になる。コミュニティの崩壊は、都市が自然から切断されたところに成立しうる条件を備えている性格と無関係ではない。先に、建築が均質空間を理念とした条件のひとつに、建物の内部の領域を自然から切断しうる技術的な準備があつたことをみてきたが、それとはちがった局面ではあるが、やはり都市は自らを自然から切断できたのだ。都市はもともと一次的な生産の色彩が少ない領域ではあるが、内部に自然のもつ生産力に頼る部分を内包していた場合も少なくない。この場合、自然は潜在力をもつていて、これから現象する自然として集団の前にある。その潜在力を、どう共有し、分有してゆくかを人々は協議し、空間的に表現しなくてはならない。この過程は好むと好まざるとにかかわらず避けることができない。この過程は、コミュニティの発生の母胎である。また、自然力の所有関係を空間的に表現するとすれば、諸施設あるいは意味ある事物などを特定な形態のもとに配列しな

くてはならなくなる。少なくとも、都市のこうした部分領域には均質空間の性格は貫徹されまいだろう。

空間が単なる広がりのみなされ、その広がりだけが生産力にかかわり、場所の特性と生産力との関係が薄らぐと、そこにはすでに現象してしまつた自然しか残されない。するとその場所に住む人々は、自然の生産力を媒介として協議し、制度化すべき事項を共同にかかえこむことはなくなる。従つて、ひとつの社会規約をもつた集団形成の契機は薄らぐといつてよい。近代の都市は、衰弱した自然とのかかわりを期待する空間だけを残して、自然の潜在力をヨウ^(ウ)セイ^ルする部分を除くことに成功した。もちろん、この条件をそなえるための技術的準備があつたからである。このあたりの事情は、近代都市の空間編成上のモットーである「職住分離」によつてよく説明されている。職住分離が可能なのは、近代の都市での生産活動が、工業生産あるいはその管理に類する活動、あるいは消費とサービスを主軸とする活動がほとんどになつたからであつて、生産を剥離された住居の集合は著しい内容の変質をみたのである。もともと、都市はその発展の過程において、純粋に新しい機能を人々の生活に附加してきた反面、住居から様々の機能を抽出し、これを集約的に処理する役割を果してきた点も見逃せない。古くは個々の住居、あるいはごく限られた狭い領域に分布する住居の集合が、ほとんど自給自足可能な多くの空間的装置を自己所有していた。そうした装置類は、徐々に都市に吸収されてゆき、住居には遂にほんのわずかの生活装置としての空間だけが残されるだけになる。この過程は、水や燃料の供給をみただけでもあきらかであろう。

(2) 住居の衰退は、そのままコミュニティの崩壊につながっている。飲料水が住居に供給される段階ではすでに加工された製品であつて、すでに現象してしまつた自然として送りこまれる。これから現象してくる自然を対象にしているのは、家族やその集合ではなく、都市の管理者である。ある住居に供給されている水は、遠く離れた住居にも同様に供給されている。生活に必要な物資は、全て近隣とは無関係に生産供給されて、近隣の境界、場所の境界は日常生活のうえから撤去される。自然力との連結の手がかりを失つた住居は、生活に必要であるのみなされる最小の広さだけを残し、また自然といえばせいぜい日光や空気といった矮小化された自然だけを残して、都市内に分布する。こうした住居の分布形態つまり住居の配列は、自然との相関が切斷されたが故に極めて機械的配列を許すようになる。かくて、都市のなかで最も均質空間の出現をはばむ部分、前近代性を残すと予

想された住居が集まる部分にさえ、自然からの切断や場所性の捨象は準備されたのだった。

都市や村は、ひとつの社会化された自然であって、近代的な都市といえども高度に自然を社会化した表現形態であることにはかわりない。近代の都市において自然が矮小化されたといっても、たまたま偶然にあるいはヨ^(エ)ギなく矮小化してしまったのではなく、制度として自然と近隣的な集団とを切断したのである。一般に水や燃料の供給といった場合、衛生管理や効率からすれば必然的に集約化されると考えられがちであるが、厳密な意味でこうした集約化が適当かどうか検討されたことはまずないだろう。D、考え方によっては、場所との絆をもち、それぞれの場所に空間的な意味を附与し、自立した領域としての

閫^{きま}を形成する集団を廃棄することが、近代の意志としてあり、この解体なくしては近代が近代たりえなかつたとも思われる。(3) 移動性の増大は、場所に依拠した閉じた部分領域の境界を強力に開かせるこのうえない道具だてであつたとみなせるだろう。

近代都市がいかに自然を社会化し、ひとつの制度に転化したかは、またちがつた角度からとらえることができる。それは空地(あきち)の消滅である。いま都市の土地を概括して、共有地、私有地、空地の三つのカテゴリーに分割した場合、これらの三項目の組合せは、都市の制度を直接的に表示する。たとえば共有地だけからできている都市を想定することもできるし、共有地と空地からなる都市空間もイメージできる。それらは漠然とはしているが、社会の制度的な形態をイメージさせる。近代の都市は、空地が欠落し、共有地と私有地からなる空間を準備した。つまり全ての土地は厳しく管理された空間なのである。中世的な共同体を浪漫的に懐古するとき、おしなべて広場は空地のひとつの空間表現であるように錯覚されがちである。が実際には多くの広場は共有地であって、都市を支配してゆくうえで最も中核となる空間としてはたらいたと思われる。共同体が自衛上擁していたのは空地としての広場であって、それは多くの場合広場の体裁をとってはいない。近代の都市の新興部分、新たに建設された住宅地などに意識的に広場が計画されたが、それらのほとんどは計画の意に反して失敗している。なぜなら、それは管理された共有地であり、そこからは共同して自由に抽出できる自然力が少なかったからである。空地は、自己管理の場所、相互に見張りあう空間であり、従って使用にあたっては、空地として放棄するのではなく、有形無形に使用のための規約を用意しなくてはならない。その社会的な規約が、特有の空間的な意味を派生した。共有地の多くは発生期を別にすれば領域内の秩序だてのため

に支配の側から与えられた。空地は、少なからずこの支配に対抗する側の手にあった。近代は、そうした空間を完全に排除するように進展してきた。もうひとつの管理層の派生と、もうひとつの社会的な規約の成立を回避し、空間的に意味が(オ)バイヨウされることを極度に嫌ったのである。

空地のような不透明な部分が消去されれば、都市全体は見透される構造をもつ。空地はこれをめぐる住み手が相互に見張り合う構造をもち、また生産地をかかえれば自然力の分配のためにやはり相互に見張ることが欠かせない。都市の住み手は、もはや自然をめぐる利害関係から手をひかさされ、周辺をみようともしなくなる。ただ、都市全体を鳥瞰する管理組織だけが全体を見すかそうと意を払う。こうしたところに興味深い現象があらわれる。それは都市の動態は、ある量をひとつのマスとしてとらえる一般的な類似した傾向をもって現象するという事実である。人間ひとりひとりの動きはいかにも多様に見え、都市の物的な環境も建物個体にまで微視的にみればそれぞれにちがっている。

E、それらがある一群としてとらえた場合、統計的に類似した傾向を示すのである。こうした現象とその把握を計画の基礎にすえるのが適当であるかどうかは別として、観測の手段をもつ管理部分は都市の様相を必要ならば見透すことが可能である。

この都市の性格は、均質空間を考察してゆくうえで、極めて暗示的である。都市で地縁的な集団から相互に切断された個人を、再び組織をめぐって離合集散させるためには、なんらかのかたちで全体を把える手段が残されていなくてはならないからである。もしこの手段が失われているとすれば、自由は(注2)レセ・フェールに転化する。現在では都市空間での挙動が、必ずしも空間的な道具だてによって統御される都市構造は用意されていない。都市は空間的にみるかぎり、かなり個人が自由に行動できるように見えている。人々の動きを制御する空間的に表示された闘は見えていない。近代都市は、こうした物象化された闘を撤去し、逆に経済的操作、法的体系、軍事力などによって社会的規約を強化したところに著しい特色がある。建物で「壁をとりはずす」(注3)必要のない空間を述べてきたが、都市からもまた城壁や門構えは消えた。(4)ある意味では、権力は不可視になった。

(原広司『空間〈機能から様相へ〉』による)

(注1) プロット——(物語・小説・戯曲・映画などの)筋立て、構想。

(注2) レセ・フェール——「なすに任せよ」の意のフランス語。自由放任主義。

(注3) 「壁をとりはずす」必要のない空間——本文より前の部分で、筆者はオフィスビルに代表される近代建築の特徴として、建物内部がどの部分も均質でどのような目的にも使用できる点を指摘している。「『壁をとりはずす』必要のない」とは、建物内部が機能別に仕切られていない、つまりそもそも「壁」がないことをいう。

*問題の作成上の都合で本文の一部に手を加えてある。

問1 傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

①
⑤

(ア) キボ

① チョウボの数字と合わない

② 蔓草が壁いっぱいにはんもする

③ 祖父のボダイを弔う

④ 設計図通りにモケイを作る

⑤ 王族のリョウボを見学する

(イ) コオウ

① センオウな態度

② オウメン鏡に映った姿

③ 非難のオウシュウ

④ 契約書のオウイン

⑤ 太宰治のオウトウ忌

(ウ) ヨウセイ

① 若くしてセイキヨする

② イッセイ一代の演技

③ 故郷を離れてイクセイソウ

④ 賄賂セイタクが露見する

⑤ 過去の行いをセイサツする

(エ) ヨギ

① 当日のギダイとする

② ジギを得た行動

③ 方法論的カイギ

④ ギタイ語を多用する

⑤ 宗教ギレイを研究する

(オ) バイヨウ

① 事故のバイショウを請求する

② 庭で野菜をサイバイする

③ 思わぬ反撃にロウバイする

④ バイシンの重責を果たす

⑤ 高いバイリツの競争に挑む

問2

空欄

A

く

E

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号はA—6、B—7、C—8、D—9、E—10。

- ① しかし
- ② ところで
- ③ もっとも
- ④ むしろ
- ⑤ 従って
- ⑥ とすれば

問3

傍線部①「高い自由度の移動性をそなえた都市がイメージされる」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は11。

- ① 交通機関の発展のために地域的なコミュニティが崩壊し、人々の生活が移動を前提としたもの変わっていったから。
- ② 一九三〇年代に予想以上の勢いで交通網が整備され、それまでに構想されていた都市計画のイメージが無効になってしまったから。
- ③ 交通手段の発達によって人々の行動が変容し、特定の場所を前提としない多様な集団での活動が志向されるようになったから。
- ④ 一九五〇年代には交通網の発達のために都市のどの場所の特性を利用した集団が構成されるか予測不可能になってしまったから。
- ⑤ 地域的コミュニティ形成の不可能性が語られるようになり、場所に縛られずに活動できるようになるほど交通網が整備されたから。

問4 傍線部(2)「住居の衰退は、そのままコミュニティの崩壊につながっている」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 住居が最少の機能のみを果たすものとなるとともに、自然も矮小化されたものだけが残された状態となったから。
- ② 住居は、単に寝食の場所であるだけでなく、近隣の人々との協力で維持される社会基盤をも含むものだったから。
- ③ 住居の衰退によって生活を支える基盤は都市の管理するものとなり、人々もその利便性を享受するようになったから。
- ④ 周囲と共有されていた生活の基盤を抱え込んだ住居が衰退することで、周囲の人々と共働することがなくなったから。
- ⑤ 住居が最小化されることで自然力との関係が失われ、都市の提供する矯正された自然との関わりしかなかったから。

問5

傍線部(3)「移動性の増大は、場所に依拠した閉じた部分領域の境界を強力に開かせるこのうえない道具だてであった」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 近代が近代たりうるためには人々の活動と場所との関係を無化しなければならなかったので、社会的に人々の移動の頻度を上げる必要が生じたということ。
- ② 人々が場所にこだわらずに行動範囲を拡げてゆくことで、場所に結びついた活動の意味がなくなり、領域相互の差異も問題とならなくなったということ。
- ③ 人々の移動の可能性の増大によって、近代の意志は自立した領域の闕を形成する集団を無効化する志向を持つようになったということ。
- ④ 場所や領域にはそれぞれ独自の活動と結びついた意味があったが、人々が移動しながら活動するようになることでそれらの意味も変化していったということ。
- ⑤ 場所の固有の意味を剥奪しようとする近代的意識にとって、人々の移動の一般化はその意図が貫徹されてゆく上で非常に効果的に作用したということ。

問6 傍線部(4)「ある意味では、権力は不可視になった」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちか

ら一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 近代の権力は場所や領域と人間の活動との結びつきを断ち、自由に組織される集団に個人を包摂してゆくために自身は背景に退いて統御するようになったということ。
- ② 近代は場所の持っていた固有の意味を否定して均質な空間に変えるために権力の存在を隠蔽し、権力を象徴する建造物を作ることもなくなったということ。
- ③ 都市空間は一見個人が自由に行動できるように思われるが、実際には整備された交通網に添って移動できるに過ぎず、それを統御している権力は表に現れないということ。
- ④ 空間に固有の意味を与えることを忌避する近代的志向を背景に、権力はその存在の顕示ではなく、さまざまな社会制度を介して人々の行動を制御するようになったということ。
- ⑤ 都市の様相を鳥瞰する視点から全体の傾向を捉えようとする権力は、その存在を人々に印象づけるよりむしろ隠蔽することその目的を達成しようとするということ。

問7

本文の内容と合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。解答番号は 15 ・ 16。

- ① 近代都市に見られる空間的性質は、建築の領域で具現化された特定の意味や機能を持たない空間によって従前の都市の共同体を解体することで生じた。
- ② 「これから現象する自然」が人為的な働きかけによって豊かな生産力を示すのに対し、「すでに現象してしまった自然」は生産力の発現がなされた自然である。
- ③ 近代都市では場所の特性と人間の活動との間の緊密な関係が徐々に失われてゆき、都市もそれと相即する形であらゆる場所をつなぐ移動網としての機能が重視された。
- ④ 空地は権力の支配に対抗する自立した空間としての意味を持ち、共同で管理利用するために共同体の人間の自律的で積極的な関与を必要とした。
- ⑤ 都市における人の動きや建物の性格は混沌としているように見えても巨視的にはある共通の傾向を示しており、権力はそれを捉え利用するために現象面から姿を消した。
- ⑥ 「均質空間」とは特定の場所でないことによってそれまでの空間を特徴づけていた意味や機能の制約から脱却し、どのような目的でも使用可能な柔軟性の高い空間を意味する。

第二問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

※この部分は、著作権の関係により掲載できません。

※この部分は、著作権の関係により掲載できません。

※この部分は、著作権の関係により掲載できません。

※この部分は、著作権の関係により掲載できません。

(平野千果子『人種主義の歴史』による)

問1

本文中の空欄

I

く

V

のうちで、次の文を補う箇所として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 17。

何より被害は個別のものであって、そのことが現在の社会秩序を変える性質をもたない。

①

I

②

II

③

III

④

IV

⑤

V

問2

空欄

X

・

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 18・19。

X
Y

① 習性

② 性格

③ 属性

④ 地位

⑤ 前歴

① 固定化

② 複雑化

③ 一元化

④ 貧困化

⑤ 多様化

18 19

問3 傍線部(1)「差別が社会的に構造化されシステムティックに起きる」とあるが、どういふことか。その説明として最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 差別を前提に構築されてきた社会システムが、差別を禁止する法が整備された後にも人々を規定し新しい差別が生産され続けること。
- ② 差別的な認識や発想が自明のものとして社会的に共有され、人々が自己の差別的な言動について無自覚なままそれが繰り返されること。
- ③ 簡単には消えることのない差別意識によって人々が意図的に差別に加担する現象が、法的に差別が禁止された後にも残り続けること。
- ④ 旧態依然とした意識が時代が変わっても残り続け、無意識的な差別が再生産されることによって社会の治安が徐々に不安定になってゆくこと。
- ⑤ 目に見えない形で隠然と残り続ける、過去の歴史的経緯から生じた排外的意識が人々の日常的な差別的言動を正当化していること。

問4

傍線部(2)「新人種主義はそれを逆手にとったもの」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 本来の文化相対主義は文化間の独自性を重視し価値的な差異を認めないが、新人種主義は文化の相対性を標榜しながら価値的な序列化を試み、異なる文化を疎外しようとするということ。
- ② 文化相対主義はもともと文化の違いを尊重し各文化の序列化を戒める思想だったが、新人種主義はその理論を延長してゆくことで結果的に文化の違いを絶対化しようとしているということ。
- ③ 新人種主義は自己の思想を理論的に基礎づけるために文化相対主義の各文化間の差異の承認という主張を利用し、異なる文化の価値を否認してそれを社会的に疎外しようとするということ。
- ④ 文化相対主義は本来各文化間の差異を認め相互に尊重し合うことを提唱するが、新人種主義はその差異を強調することから他文化を排斥する自己の主張を正当化しようとするということ。
- ⑤ 新人種主義は文化相対主義の後継を称しながら文化相対主義のリベラルで革新的な性格を除外し、自己の価値観の上から意に染まない異文化集団を排除しようとする思想であるということ。

問5

傍線部(3)「人種問題とは結局のところ、差別する側／される側双方にとって自他の区別を基とするアイデンティティの問題ではないか」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22。

- ① 人種問題に関しては、差別の主体であれその被害者であれ、いずれも自己の立場にとって不利な状況を拒絶しようとする意図を持って差別をしているという点で共通するから。
- ② 差別する側もされる側も、自分が帰属する社会集団の利害を考えて主張をしているという点で変わりはなく、自己利益を優先しているという点で正当性に欠けるから。
- ③ 人種差別とされる事例を検討すると、差別する側される側双方の主張がいずれも自己の帰属すると考える社会集団の立場を補強しようとする点で同じ構造を共有しているから。
- ④ 差別の主体であれ客体であれ、根拠の定かではない「人種」という概念に依拠して自己を主張し、具体的な事例についての判断をしているという点では変わりがないから。
- ⑤ 人種問題に関する主張を通覧してみると、差別する側もされる側も自己が帰属意識を持つ社会集団と他の社会集団との関係を前提に個別の事象について評価しているから。

問6 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **23**。

① 差別の是正措置が執られたことで、これまでとは逆の差別が生じているという主張がなされ、結果として無惨な事件も起こった。

- ② 過去の差別を糾弾された白人の側は、自分たちの過去の行いを正当化するために新人種主義を唱えて批判に対抗した。
- ③ 人種を実体視する考え方は文化的多様性と生物種の多様性を混同した謬見であり、正当性があるとは言えない。
- ④ たとえ見た目が白人であっても混血であるために差別された若者は相手を「汚い白人」と罵って有罪判決を受けた。
- ⑤ 反白人の人種主義の存在について、各市民団体は自己のアイデンティティや世間の目を配慮して態度を決めている。

第三問 以下の問いに答えよ。

問1 次の文の「して」と同じ用法のものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

傘寿に|して、いまだ健脚ぶりを発揮している。

- ① 事情が許さないが、私はどう|しても研究を続けたい。
- ② 何度も何度も|請願して、やっと面会がなかった。
- ③ 来週の日曜日は、みんな|してハイキングに行きましょう。
- ④ 若く|して名を成したいならスポーツ選手がよい。
- ⑤ 染め物を水に|さらして鮮やかに発色させる。

問2 すべて正しい漢字が使われている文を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① この作品は箸にも傍にもかからない出来の悪さだ。
- ② 我が校の野球部は質実剛健をモットーとしている。
- ③ かつては鋭かった感覚も鈍摩してしまった。
- ④ 東洋医学は心身一対の考え方を基盤とする。
- ⑤ エネルギーの無駄を省いた循環型社会を目指す。

問3 A・Bの外来語とその訳語の組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 26・27。

A 26

- ① トートロジーー同義反復
- ② リテラシーー活用能力
- ③ コスモロジーー宇宙論
- ④ ラプソディーー狂詩曲
- ⑤ アナロジーー分析

B 27

- ① デーモンー精霊
- ② ギミックー仕掛け
- ③ ユリイカー規範
- ④ アポリアー難問
- ⑤ メッカー聖地

問4 次のX～Zの漢字と読みの組み合わせとして正しくないものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 28 ～ 30。

Z

30

⑤	④	③	②	①
譬	象	祖	番	態
—	—	—	—	—
しるし	かたち	おや	つがい	わざ

X

28

⑤	④	③	②	①
今生	堆積	埋没	統帥	容色
—	—	—	—	—
こんじょう	すいせき	まいぼつ	とうすい	ようしよく

Y

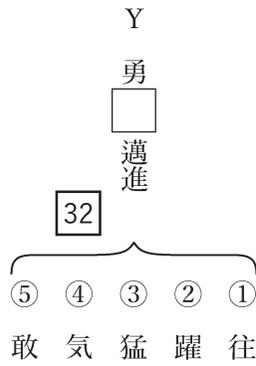
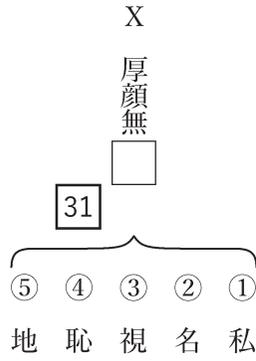
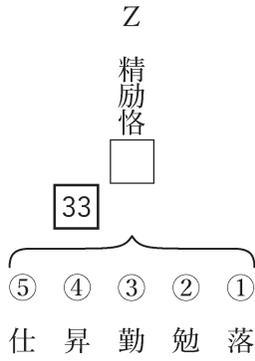
29

⑤	④	③	②	①
蠢動	情況	推奨	徽章	評釈
—	—	—	—	—
しゅんどう	じょうきよう	すいしょう	ちようしょう	ひようしゃく

問5

次のX～Zの四字熟語の空欄を補うのに最も適当なものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

31
～
33。



問6 次の熟語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **34**。

白眉

- ① 年功を経てものごとに熟達した人のこと。
- ② 長い時間を経て古びたものたとえ。
- ③ 特に目立って優れた人やものこと。
- ④ 優れた人がその能力ゆえに衰えてしまうこと。
- ⑤ よくあるようで実はなかなかないものたとえ。

問7 慣用句の使い方として正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **35**。

- ① 無理なことを要求してくるので、いくら親しくても二つ返事で断るほかない。
- ② 苦勞した小説だが、ある日を境に筆が滑るようになって締切り前に完成した。
- ③ 目が飛び出るほど美しい音楽を聞いて、うっとりとした良い気分になった。
- ④ 長い間訴え続けた主張が今日ようやく社会に認められて感に堪えない。
- ⑤ 枯木も山の賑わいと申しますので、本日の会合にぜひご参加ください。

問8 作家と作品の組み合わせとして正しくないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 矢野龍溪 | 『佳人之奇遇』
- ② 坪内逍遙 | 『当世書生氣質』
- ③ 泉鏡花 | 『高野聖』
- ④ 正宗白鳥 | 『泥人形』
- ⑤ 川端康成 | 『山の音』

正 答 表

入試区分： 一般A日程入試2月1日試験

科目： 国語

問題番号	正 答	問題形式	備考
1	4	一問一答	
2	3	一問一答	
3	4	一問一答	
4	5	一問一答	
5	2	一問一答	
6	5	一問一答	
7	3	一問一答	
8	6	一問一答	
9	4	一問一答	
10	1	一問一答	
11	3	一問一答	
12	2	一問一答	
13	5	一問一答	
14	4	一問一答	
15	3	複数組み合わせ順不問個別	
16	4	複数組み合わせ順不問個別	
17	3	一問一答	
18	3	一問一答	
19	5	一問一答	
20	2	一問一答	
21	4	一問一答	
22	5	一問一答	
23	3	一問一答	
24	4	一問一答	
25	2	一問一答	
26	5	一問一答	
27	3	一問一答	
28	4	一問一答	
29	2	一問一答	
30	5	一問一答	
31	4	一問一答	
32	1	一問一答	
33	3	一問一答	
34	3	一問一答	
35	4	一問一答	
36	1	一問一答	